



## 地域のランドマークを目指して



県立野田特別支援学校校長 まつもと いわお 松本 巖

### 1 はじめに

本校は開校33年目であり昨年度までは知的障害単一の特別支援学校として歩んできたが、その歩みの中で通級による指導として「視覚」「聴覚」「肢体不自由」の3つの障害へも対応してきたことで地域における特別支援教育のセンターとしての役割を果たしてきた。

そして今年度から総合的な教育機能を有する学校として従来の知的障害に加え肢体不自由も対象とした特別支援学校として新たな歩みを始めたところである。

また令和4年3月には「第3次千葉県特別支援教育推進基本計画」が示され、その計画の実現とともに新たな学校創りの時期となる大きな節目の今年度に「学校を創る」というタイトルで本校の取組を紹介できることはまさにタイムリーである。

ここではこれまでの本校の取組や積み重ねの上に新たな「学校を創る」ための5つの取組を紹介する。

### 2 今年度の取組

#### (1)通級による指導の拡充

通級による指導は小学校や中学校に通いながら必要な支援が受けられる体制を整えている。令和4年度は肢体不自由5名、聴覚障害6名、視覚障害8名に対して4名の教員を配置し、指導・支援を行っている。特に今年度から肢体不自由も対象となったことから当該担当を2名とした。

次年度は対象児童生徒が増えることが予想されることから教員の増置を検討している。

#### (2)県教育委員会の研究指定の活用

今年度は「交流及び共同学習」の研究指定を受け実践研究に取り組んでいる。研究テーマは「障害の有無に関わらず地域で共に学び育つための交流及び共同学習」とし学校間交流と居住地校交流についてより充実した取組と新たな可能性を広げる実践研究を行った。

学校間交流はコロナ禍により3年ぶりの再開であり2年間中断していたことやコロナ禍が終息していない中での再開は「ピンチをチャンスに」の合言葉のもと、直接交流に加えZoomや校内Wi-Fiを活用した間接交流を実施した。特にアプリを使ったボッチャ対戦や訪問学級の児童が自宅から参加した形態はこれまでになかったハイブリッドで画期的な交流となった。

またボッチャ体験をきっかけに交流先の高校では校内球技大会に新種目としてボッチャが取り入れられたり文化祭ではボッチャ体験ブースが設けられたりし、学校間交流の新たなステージへの可能性が広がった。

居住地校交流もコロナ禍で中断していたが再開に向け先進的に取り組んでいる東京都から講師を招聘し研修会等を開催した。野田市教育委員会と県教育委員会からも担当指導主事に参加してもらい現状と展望を明らかにしながら県教育委員会と野田市教育委員会との連携・協力により『のだとく版副次的な籍実施マニュアル(案)』を作成することができた。次年度は副次的な籍をおいた居住地校交流の実施を進めていく。

### (3)「のだとく相談支援ルーム」の開設

特別な教育的支援が必要な子供たちの「学校生活のこと」や「発達のこと」についての相談に対応していくことは特別支援学校が担うセンター的機能の重要な部分である。

加えて地域の小中学校等における特別な支援の必要な児童生徒への対応等に対するサポート機能の充実を図ることも地域の特別支援教育の推進において大きな役割を担うものである。

地域の教育相談における今年度までの本校の取組は「夏季のだとく相談」という名称で夏季休暇中に3日間の教育相談を行ってきた。ただ期間が限定されていることから期間内の相談者が毎年減少している。また期間外の問合せが増えていることから期間限定の相談を廃止し常時開設の相談支援機関として「のだとく相談支援ルーム」を設置することとした。来年度の設置に向け、県総合教育センター特別支援教育部の担っている教育相談機能を地域において果たさなければならないことの意義や役割を、教職員が理解することで、この取組が機能し、本校の教職員一人一人の専門性の向上とともに地域の方への直接的な支援や近隣学校における特別支援教育の実践的な推進がなされると考える。

### (4)コミュニティ・スクール（学校評議委員会）の導入

千葉県においてコミュニティ・スクール（以下、CS）の導入は積極的に進めている施策であり今後の学校経営にはなくてはならない組織である。私は前任校においても導入に取組み地域とともに学校を運営し子供たちを育てることの大切さと有効性を実感してきた。

そこで今年度、千葉県のCS導入ガイダンスに沿って準備を開始した。

本校の学区は昨年度まで野田市のみだったことから地域住民との関りが深く、近隣の小

中学校や高等学校とも緊密な関係性を築いてきた。そのため現在の「開かれた学校づくり委員会」の取組も地域に密着したものではあるがCSを導入することで、より学校と地域が一体感を共有し協働して子供たちの育てる地域を実現したい。

### (5)職員研修の充実

職員の研修は悉皆も含めすでにすべての学校において充実が図られているところではあるが、本校は果たすべき役割（総合的な教育機能を有する学校）として視覚障害と聴覚障害、肢体不自由へのより高い専門性が求められている。

そのため千葉盲学校、千葉聾学校へ職員を派遣し指導の現場で研修を行わせてもらう他障害校研修を実施した。受講者は自校で伝達研修を行い、視覚・聴覚に支援が必要な児童生徒が在籍する教員を中心に学校全体の専門性の向上を図ることができた。

また千葉盲学校から講師を招聘した研修会では具体的な実践を学ぶとともに人的繋がりができたことは大きな成果であった。

## 3 まとめ

これからの10年、学校を取巻く環境の変化は、スピードを増し特別支援学校が地域で果たす役割はさらに大きく重要になってくるだろう。「特別支援教育は教育の原点である」とともに「特別支援教育は教育の核」となっていくだろう。

また学校は人を育てる場であることは変わらないが、変わりゆく社会で学校現場がその学び方や地域において果たす役割は変わっていくだろう。

紹介した5つの取組は小さな挑戦であるが、今後も常に新しい学校創りを目指してできることから挑戦し続けたい。



## 「思いをつなげる9年間の連続した学び」を実現するために ～義務教育学校の教頭として学んだこと、伝えていきたいこと～

成田市立下総みどり学園教頭 おおつか こうじ 大塚 幸治



### 1 はじめに

私の勤務する下総みどり学園は、平成26年度に下総地区4小学校（滑河・小御門・名木・高岡）が統合し、下総中学校の敷地内に下総小学校として創立。小中一貫校としてスタートした後に、平成29年度より義務教育学校となった。最初の統合から9年目を迎え、現在の9年生は、入学から卒業まで小中一貫での学びを体験する初めての生徒となる。

学区は千葉県北部の中央に位置し、利根川の南岸に広がる緑豊かな田園と丘陵地帯からなる。滑河観音、小御門神社等、数多くの神社仏閣が昔の面影を残し、かつては成田空港の影響による開発に伴い人口の漸増傾向が見られたが、近年の児童生徒数は減少している。

### 2 本校の特色

「思いをつなげる9年間の連続した学び」を実現するため、小中学校の垣根をなくし、児童・生徒、教職員の相互理解を深め、既存の枠に捉われない弾力的な取組を行っている。

#### (1)ブロック制の導入

子供の実態に合わせ、9年間の区分を、前期ブロック（1～4学年）、中期ブロック（5～7学年）、後期ブロック（8・9学年）としている。ブロックごとに校外学習やレク大会などの行事、学習発表会などを行い、それぞれのブロックでリーダー育成を行っている。生徒会活動は5年生からスタートする。

#### (2)5年生からの教科担任制

本校では中期ブロックにあたる5年生から

教科担任制をとり、50分授業を行っている。子供たちは早期からより専門的な授業を受けることができ、教員も教科が絞られることで教材研究の時間に余裕ができています。

#### (3)異学年交流

全校での交流として、縦割り班（各学年の児童生徒2名ずつ、18名程度の班を18班作成）を形成し、日々の清掃、給食（学期1回、感染症対策から現在は控えている）全校レク（学期1回程度）を行っている。

また学習活動の中でも、異学年同士の総合学習発表会や合同体験学習、上級生から下級生へのビブリオバトルや読み聞かせなど、学び合う場面を設定している。

### 3 義務教育学校に着任して

1年目は前期課程の教頭として業務にあたるとともに、1～4年生の書写を担当し、児童に接する機会を得た。本来中学校籍であった私は、当初義務教育学校に対する戸惑いと同時に、低学年に接する不安を強く抱いた。

2年目は後期課程に移り9年生の国語科を担当している。本校は教頭が2名おり、共同で業務に当たってはいるが、小・中の区別に従い分担している業務も多く、前期から後期に移ることは、新たな学校へ異動するような感覚もあった。

2年間で前期課程、後期課程両方の立場から義務教育学校を経験し、その中で学んだことを以下に述べていきたい。

## 4 学んだこと

### (1)管理職間の協力の重要性

本校には管理職として、校長の下、副校長が1名、教頭が2名配置されている。1年生から9年生までの縦長で広い学校を全職員で見えていくうえで、前期・後期に捉われない発想は非常に重要であり、それを体現するのが管理職でなくてはならない。

特に教頭は、前・後期それぞれをメインとしながら協力し、分業と協働を心掛けていかなければ、学校全体が見えなくなり、盲点が生まれてしまう。まず校長、副校長から学びつつ、報告、連絡、相談を心掛け、教頭間でしっかりと連携しお互いを生かしていくことが、複数の管理職配置の利点を最大限発揮するカギになると感じている。

### (2)ひとりひとりの力を最大限に

教頭として前期・後期の両方を経験できたことにより、両課程の教職員の素晴らしさを改めて実感できた。一日中きめ細かく児童に接する前期ブロック、全力で生徒と向き合い学校のリーダーを育てる後期ブロック、その間の成長のステップを支える中期ブロック。それぞれの課程、ブロックの特色を理解し、子供たちの様子と共にそれぞれの教職員の頑張りを、保護者や地域、そして何より教職員自身に伝えていければと考える。

教職員が自らの取組に自信をもち、ひとりひとりがお互いを尊重して最大限に力を発揮した時に、学校の力が最大になると信じて、今後も教頭として取り組んでいきたい。

### (3) みどり学園を創る＝地域の未来を創る

先述のとおり、本年度の9年生は、下総地区の学校が統合した際に1年生として入学し、ずっと9年生の背中を見て育ってきた生徒である。当たり前のように9学年が一緒に生活し、上級生が下級生の手を引き、下級生が屈

託のない笑顔で上級生に元気を与える。また、今の9年生が1・2年生だった時に面倒を見ていた学生が、教育実習生やボランティアとしてみどり学園に戻ってきている。

下総みどり学園には、下総地区の児童生徒が全員通ってくる。スクールバスに乗ることもままならなかった1年生が、学校のリーダーとなり、9年生として卒業した後、成長し地域に戻ってくる。本校は隣接する下総高等学校とも食育事業やプログラミング学習で連携しており、地域の方々からも様々な行事で協力をいただいている。まさにみどり学園を創ることが、地域の未来を創ることである。

## 5 次年度以降へ向けて

次年度は統合から10年目となる。地域や保護者にも義務教育学校の取組が浸透し、職員も大きく入れ替わった。独自の教育課程の下、様々な実践を重ね、今、それを振り返る時期に来ている。改めて教育課程検討委員会を通して各ブロックの意識や教育課程の実施方法のすり合わせを図りながら、準備を進めている。前期・後期の連携を一層進める貴重な機会として効果的に機能できるよう努めたい。

私は前任の中学校でも3学年主任として中学校同士の統合を経験したが、子供たちは遅くその事実を受け入れていった。みどり学園の子供たちからも、それを感じる。

私たち大人も、新しい学びを受け入れ、生かしていきたい。前期・後期の連携は大変で、小、中学校に異動した際に不安を感じる職員も多いだろう。しかし、私が感じたように、この「特別」なみどり学園に来たことは、間違いなく今後の教員人生の糧となり誇りとなり得る。私は教頭として、学校を支え、職員を支え、子供たちを支えながら、そのことを職員に伝え、真摯に働きかけていきたい。



## 小学校併設型中学校の 教務主任として



長南町立長南中学校教諭 いげた やすゆき 井下田 靖之

### 1 はじめに

私が勤務する長南中学校の大きな特徴は、小学生と中学生が施設や設備を共有して生活していることである。平成28年度に町内4つの小学校が統合され、中学校の敷地内に校舎が建設された。翌29年度から小中一貫型教育が開始されているが、今年度からは、小学校併設型中学校として新たなスタートを切った。県内には本校と同様の学校が増えており、同じ立場にある教務主任と情報を共有できればと考えている。そこで今回は、私の実践の一端を紹介する。

### 2 小学校との橋渡し

私の場合、一般的な教務主任の仕事に加え、小学校との橋渡しの役がある。教務主任としての仕事を3つに分類し、それぞれについて小学校との関わりを交えて話を進めたい。

#### (1)教育計画の立案・実施、時間割の調整

##### ①年間行事計画

小中学校それぞれで作成した校内行事等をすり合わせ、日時を決定していく。小中合同でできる行事（避難訓練、芸術鑑賞会など）は一緒に実施している。

##### ②時程・時間割

中学校は1単位時間50分、小学校は45分のため、時程にずれが生じるが、無駄のないように時程を組むように心がけている。基本的に小中で1、3、5校時の開始時刻を合わせ調整している。時間割は中学校の都合だけで編成することはできない。小学生の発達段階にも配慮が必要である。授業交換や特別日課

の際は変更が容易にできないため、施設や時間が重ならないように工夫が必要となっている。

#### (2)連絡調整

必要に応じて、随時小学校とは連絡を取るようになっている。職員会議のあとには資料を小学校と交換し、月の行事予定や、行事の内容等の確認を行う。また、週に一度、次週の週報を持ち寄り、施設や時間が重なることがないか確認を行っている。重要なことは中学校職員に周知している。

#### (3)指導、助言

学校を効率的に動かすためには、職員に対して言いにくいことも言わなければならないことがある。また、困っている職員に対しても手を差し伸べていかねばならない。これは小学校との関係においても同様である。小中学校が協力し、お互いのストロングポイントを最大限に発揮していくための第一歩として対話を大切にしている。中学校卒業までのゴールを目指し、小中学校というチームの中で職員個々の能力が発揮できるような環境づくりに努めている。

### 3 おわりに

本校では今後、小中相互の乗り入れ授業が、今以上に広く展開されていく予定である。学力向上、体力向上に向けて更に小中が連携を深めていくことになる。私の仕事はたくさんの人たちに支えられており、周囲の協力なくしてはできないと思っている。感謝の気持ちを忘れず、クリエイティブであり続けようと思う。



## 充実した毎日

県立幕張総合高等学校教諭 おいかわ 及川 ゆりえ 友利江



教員生活の2年目ももう半分を越え、新たな学年、学級、部活動など、昨年度とは異なる環境に身を置きながら日々過ごしている。昨年度は、「2年目になればそれなりに余裕ができて、授業やいろいろな仕事に対してもっと積極的に取り組めるようになるかな」などと考えていたが、実際にはまるで余裕のない日々を送っている。しかし、大変すぎて困っているということではなく、忙しいながらも非常に充実した生活を送ることができている。

現在担任しているクラスは明るく活発な生徒が多く、毎日クラスに元気をわけてもらいに行っているような気もしている。昨年度は、「自分が担任をもつなんて大丈夫か」と本気で心配をしたものだが、やってみると「楽しい」の一言で、副担任の頃よりも生徒との関わりが増え、教員として日々成長しているように感じている。

生徒に対して、将来のことをいろいろ考えるよう促す立場にしながら、自身が高校生の頃は将来のことなどきちんと考えず、部活動ばかりに没頭していた。当時の自分と似たような生活をする高校生を相手に、何をどのように伝えるべきか、日々考えながら関わっているが、やはり自分のやりたいことに一生懸命になって、後悔の無いよう3年間を過ごしてほしいという思いが一番強い。生徒にも、勉強や部活動、友人との関わりなど、忙しいながらも充実した毎日を送ってほしいと願っている。



## 「笑顔、元気、ありがとう We Love Nakagawa!」

袖ヶ浦市立中川小学校教諭 あさい 浅井 たかし 孝



私が大切にしていることは「子供たちが、明日また学校に来たいと思う笑顔の絶えない学級をつくること」と「子供たちの話をよく聞くこと」である。

今年度、6年生の担任を任せられ、子供たちと最高の思い出をつくり卒業させたいとの思いをもって臨んだ。しかし、人間関係がうまく作れないなど生徒指導の場面がいくつも続いた。どうしたらよいか悩むとき、周りの先生方が力になってくれた。家庭訪問に行ったり保護者と連絡をとったりしながら、必死に問題解決に努めた。自分自身が必死で笑顔を忘れていた。そんな時に子供たちの明るい笑顔に元気づけられた。

学校行事では、子供たちはどれも全力で行ってきた。どんなときでも全力でやるからこそその成長があり、みんなで取り組むから生まれる絆がある。そのために私自身が本気で取り組むことと、率先垂範という姿で子供たちのやる気を引き出すことが大切だと気づいた。少しずつ変わってきた学級。そこには私自身だけでなくたくさんの先生方の力添えがあった。最高学年としてさらに良い学級にしていこうとする6年生の力があつた。中川小学校では、「笑顔、元気、ありがとう We Love Nakagawa!」という合言葉がある。この合言葉によって学校が一つになっていると感じる。子供たちの笑顔が溢れる学級にしていけるように、私自身が笑顔を忘れず、これからも研鑽に励んでいきたい。



## 国語科における「話すこと・聞くこと」の学習の工夫 ～自分たちの学校をよりよくするための討論会を通して～



勝浦市立勝浦中学校教諭 鶴岡 優貴

### 1 はじめに

「話す・聞く」力は、他者と円滑にコミュニケーションを取り、協働していくために必要不可欠な力である。しかし、音声言語がもつ一過性・即時性という特性が、教室での学びを難しくしてきた。自分の主張を相手に一方的に伝えるだけでも、受動的に聞くだけでなく、実生活に生きて働く力として、聞き手の反応を見て話したり、相手の話に耳を傾け、臨機応変に対応したりする力を伸ばしたいと考え、本単元を設定した。

### 2 単元設定の理由

「勝浦中学校をもっと過ごしやすくするための討論会を開こう」(中2国語科・11月)

#### (1) 討論について

学習指導要領において、「討論」とは「それぞれの立場からの考えを述べ、互いの考えの違いなどを基にして論じ合うこと」とある。討論という学習を通し、生徒たちは多様な価値観に触れ、その過程において自分の考えを広げ深めていくことができるだろう。自分の考えを適切な根拠をもって伝え、互いの言葉を受け止め尊重しながら論じ合い、一つの結論を導き出すという経験をすることで、言葉がもつ価値を再認識し、互いの知見を広げ深めることのできる生徒の育成を目指す。

#### (2) 学習材について

討論の題材として、「学校のきまり」を取り上げた。学校は生徒たちにとって最も身近

な社会であり、全員が実体験を伴う既有知識をもっているため、主体的に学習に臨めるだろうと考えた。また、中学校2年生の後半は、部活動の代替わりや生徒会役員選挙等が行われ、最上級生に代わって自分たちが学校を担っていかなければならないという、実感が切実になる時期でもある。さらに、自分たちの討論によって生まれた意見が学校を動かしていける可能性があるという使命感や必要感によって、学習への意欲の高まりをねらう。

### 3 単元の実際 (全6時間)

#### (1) 討論会のテーマ設定【第1～2時】

各自で学校生活を振り返り、付箋に改善したい点を書き出したところ、髪型や制服等、様々な意見が挙げられた。そこから、5～6名の班ごとに「実現が十分に可能であると考えられるもの」「個人の利益ではなく、公共の利益につながると考えられるもの」「新しく創るというよりも、今あるものを改善するという視点から考えたもの」という三つの条件を提示し、討論のテーマを絞った。

「公共の利益⇔個人の利益」、「実現の難⇔易」という比較の視点を示し、図表に付箋を貼って可視化することによって、思考の整理を図った。「タブレット使用のルール作成」や「自習室の設置」、「進級時のアンケート実施」等、多様なテーマが挙げられた。「公共の利益」という視点をもったことで、学校の代表として討論し、検討するにふさわしいテーマを真剣に考え、設定することができた。

**(2)情報の収集・内容の検討【第2～4時】**

- 立場を明確にする前に、幅広く情報を集めて整理すること
- 根拠として用いようとしている情報が自分の立場や考えを支えるものとしてふさわしい情報かどうか吟味・検討すること
- 異なる立場の考えを想定し、具体的な反論や意見に備えること

三つの条件を提示し、班で選択したテーマについて主にタブレットで情報収集を行った。情報収集の方法は、アンケートやインターネット検索、インタビュー等が挙げられた。アンケート実施の対象者は同級生、保護者、教職員、他校の友人等、多岐に渡り、様々な立場の人の意見を広く集めることで説得力が増すという意見が出た。アンケートフォームを積極的に活用し、自分たちで質問事項を作成し、集計や分析を行うなど、意欲的に臨んだ。

集めた情報は「情報カード」に書き込み、共有した。また、自分の意見と異なる立場の人の考えを予想し、それに対する反論を考えた。意見の根拠となる情報を得るために、複数の情報の関連付けや、説得力の高い情報はどのようなものかと同じ立場の仲間同士で検討する姿が見られた。

**(3)討論会での意見交流【第5時】**

討論のルールや流れを確認した後、司会者・賛成・反対の三つの立場に分かれて以下のようにおよそ20分間の討論を行った。

- テーマを確認し、一人ずつ意見を述べる
- 自分の立場を意識して討論する  
根拠に対する反論→答弁（反論の反論）  
別の視点からの反論→答弁
- 一人ずつまとめの発言をし、司会が結論をまとめる

討論を進めるためには相手の主張を正確に

聞き取り、そこから反論する材料を探して話し合いを発展させていく必要があるため、聞き手も話し手も真剣に耳を傾け、メモを取っていた。また、アンケートの自動集計結果や、自作のスライドを根拠として示しながら説明したり、討論のメモをタブレットに打ち込んだりするなど、ICT機器を活用する姿が印象的で、欠席者もリモートで討論に参加でき



た。なお、討論会はタブレットで動画撮影、ICレコーダーで音声録音を行った。

**(4)学習の振り返り【第5～6時】**

動画やICレコーダーの音声を活用して実際の自分たちの討論の様子を振り返った。「この〇〇さんの意見への反論が思いつかなくて、本当に焦った。」「ここ、まさかこう返されると思わなかったから理由が出てこなくて。もっと調べておけばよかった。」等の呟きが聞こえた。ICT機器のもつ記録性という強みを生かすことで生徒が客観的に自分の姿を省み、それぞれの課題を発見することができた。

**4 おわりに**

学校生活を討論の題材として挙げたことにより、学習意欲が持続し、主体的な学びが可能になった。反論という行為を躊躇する生徒や、反論されることに抵抗感を覚える生徒もいたが、異なる視点を与えられることによって多角的に物事を検討することができ、自らの考えが広がり深まることも実感していた。「話すこと・聞くこと」の学習におけるICT機器の有用性についても再確認できたので、さらに活用したい。今後も、目的意識・相手意識を明確にし、生徒が熱中して取り組める言語活動を設定していきたい。



# 「主体的・対話的な学び」の実現へ向けて ～ことばの教室の役割と実践～



茂原市立茂原小学校教諭 しみず 清水 かずみ 和美

## 1 はじめに

長生地区では、令和4年からの「ことばの教室」の巡回指導の実施により、他校通級がなくなった。しかし、「ことばの教室」が全ての学校にあっても「何をしている教室なのか」と思われる教員が多い現状であり、この場を借りて通級指導の取組の一端について述べていきたい。

## 2 通級による指導の対象児童について

「ことばの教室」では「言語障害が認められる児童で通常の学級での学習に概ね参加でき、一部特別な指導を必要とする程度のもの」を通級による指導の対象としている。

- 発音の誤り ・ 吃音 ・ 口蓋裂
- 発語機能の基本的事項における発達の遅れや偏り ・ 聴覚障害 ・ 脳性まひ

などによる言語障害を一人一人に合わせた指導により、発音の改善やコミュニケーション力の発達を促し、児童が自信をもって学校生活を送れるように支援をしていくことが役割である。また、「ことばの教室」での指導は、特別支援教育での「自立活動」として位置付けられている。

## 3 指導と工夫

言語障害に対する指導は、概ね次の(1)～(6)の内容について行う。しかし、LD傾向、ADHDなどの発達障害を併せもつ児童が多い。そのために、

- 発正しい発音が定着しにくい。
- 音の弁別力が低い。
- 集中して練習ができない。

などの指導上の課題がある。そこで、児童の特性に合わせた指導内容や指導形態（個別指導・グループ指導）を工夫する必要がある。

### (1)児童理解

- ①構音検査 発音の誤りの特徴を知る。
- ②自由会話 好きなこと・嫌いなこと・得意なこと・苦手なことなどを話し、苦手なことはだれにでもあることを知らせる。また、自由に話すことのできる環境づくりに努める。

### (2)聴くトレーニング

児童にとって、自分の発音の特徴に気付くことが練習の第一歩になる。

音の聞きだし→位置弁別→異同弁別→  
正誤弁別（他者・自己）

と練習を進めるが、覚えるように聞く練習も取り入れている。また、結果を自己評価させるために、○×ゲームや単語の聞き取り書きなどゲーム化して実施し、勝敗を点数で記録をするようにしている。

### (3)見るトレーニング

認知機能は「学習の土台」になるとされている。人に興味を向ける・気持ちを考える・会話をするなどは、コミュニケーション力を発揮するためには大切である。点つなぎや記号写しなどの見るトレーニングで、視覚認知

の機能を高めることを行っている。

#### (4)発語器官の機能を高める

私たちが会話をするとき、口形を変える・舌を平らにする・弾く・挙上する・息を出すなどを発語器官で高速で行う必要がある。それらが正しくできないために起こるのが「発音の誤り」である。そこで「ことばの教室」では、舌の体操で舌のコントロール力をつける練習を行っている。音楽に合わせて動きながらやったり、すごろくゲームでやったりする。また、練習の回数や時間は児童と相談をして練習に集中して取り組めるようにしている。

#### (5)発音練習

「歪音」(文字で表現ができないはっきりとしない発音)の指導は、改善に時間を要する。児童は現在の自分の獲得した発音が正しいと思っているからである。これを改善することは、右利きの児童に「左手できれいに速く文字を書こう。」というようなものである。正しい発音の獲得には、練習の継続が必要である。練習を単調に感じさせない工夫が構音指導には大切だと考える。そのために担当者は、より多くの練習方法を考え、児童個々に合ったものを見極めていかななくてはならない。指導に当たっては、①目標設定と自己評価、②練習意欲の持続、③練習量の確保の3点に重点を置き、1時間の指導計画を立てるようにしている。発音練習では、自分の課題として意識できるようにし、一人でも練習ができる練習用具を準備している。1年生では、保護者や学級担任に練習ができたなら、「たくさん褒めてほしい。」と伝えている。単音が正しく出せたら、ステップ練習帳を渡し、スモールステップで練習を進めるようにする。また、「やらされている練習」から「進んで楽しくできる練習」へと児童の意識を変えるために、

児童と練習方法の作戦会議を開いている。

＜児童の練習＞

- 鏡
- ブロック
- ストップウォッチ (キッチンタイマー)



#### (6)音づくり

正しい音づくりには色々な方法があるがその一部について示す。

①「か行音」が「た行音」に変わる置換音

- ガラガラうがいができる。
- 仰向けに寝て「あ」の口形のまま「く+あ」をいう。
- 舌先が上顎に動く時は、舌中央を舌圧子で軽く押して発音する。

②「き音」発音時に顎や舌が変位して音がはっきりしない発音になる歪音

- 舌平らで「け音」を正しくいう。
- 舌はそのまま「い音」の口形にし、舌の横を奥歯で軽く挟む。
- 「く+い」で「き音」をいう。

#### 4 おわりに (児童の感想 6年Aさん)

僕は、6年間ことばの教室で色々なことを学びました。初めは、発音練習が大変だったけれど、だんだん楽しくなり、「ことばの教室」が好きになりました。中学生になっても「ことばの教室」のことを忘れません。

児童は発音が改善したことや苦手なことへの取組から、練習の大切さを知る。また、練習の結果は「やればできる」という自信へとつながっていく。通級児童は年々増加傾向にあるが、「ことばの教室」は児童一人一人の成長を見守り続ける教室でありたいと思う。